

滋賀文教短期大学 アセスメント・プラン

2025 年度

本学では、アセスメント・プラン（学修成果の査定等に関する計画）について下記の通り定めている。
学修成果の査定により得られたデータは、「学校法人松翠学園 個人情報保護規程」を遵守し適正に扱う。

I. 3 つのレベルでの学修成果の査定

教育研究活動の質向上のため、3 つのポリシーに基づいて、機関レベル（大学全体）、教育課程レベル（各学科）、科目レベル（各授業）における学修成果を多面的に査定する。

3 つのポリシーは、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー：CP）、入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー：AP）を指す。

本学として定められているアセスメント・プランに基づき、事務担当や評価組織が査定に関する業務に取り組む。

I-1. 機関レベル

（1）査定材料・達成が望ましい水準

その年度に得られた主に下記のデータから、年度末までに全学的な学修成果を査定する。

教育課程レベル、科目レベルの学修成果については、それぞれに達成が望ましい水準を設けている。

- ①教育研究活動の全学的な方針
- ②教育課程レベルの学修成果
- ③科目レベルの学修成果
- ④自己点検・評価報告書
- ⑤学生からのヒアリング結果（学生懇談会、学生支援アンケート）

（2）査定時期・担当

年度末頃に、学長・副学長が中心となり運営協議会で査定する。

（3）学内共有の流れ

運営協議会で査定結果について協議した後、教授会で全専任教職員に概要を周知する。

（4）査定結果の活用

学長・副学長が次年度以降の大学運営及び教学に活用する。

I-2. 教育課程レベル

（1）査定材料・達成が望ましい水準

入学時から卒業後半年経過時点までの学修データから、教育課程レベルの学修成果の査定を行う。

各DPに対して、種類の異なる3つの評価の観点を設け、多角的に査定する。

望ましい水準を達成している査定材料の数により、以下の通り判定する。

査定材料3項目を達成・・・達成

査定材料2項目を達成・・・概ね達成

査定材料1項目を達成・・・ほとんど達成していないので、改善を要する

達成した査定材料なし・・・全く達成していないので、大いに改善を要する

○国文学科

DP	査定材料	GPA（学内評価）	就業状況調査（学外評価）	PROG（客観的評価）
	達成が望ましい水準	2.00～3.00	5段階中平均3以上	平均2.5以上かつレベル2以下の割合が50%以下
1	主体性及び倫理観・使命感	基礎力プログラムⅠⅡ	卒業後も自ら学び続ける力	対自己基礎力
2	専門性及び知識・技能	専門科目	文章作成能力、パソコン技能等の事務処理能力	リテラシー総合
3	思考力・判断力及び表現力	教養科目	社内や部署内全体の状況を把握した上で働く力	コンピテンシー総合
4	課題発見力及び課題解決力	ゼミⅠⅡ	課題を発見し、自分なりに考えた上で、新しいことをする力	対課題基礎力
5	コミュニケーション力及び多様な人と協働する力	基礎力プログラムⅢⅣ	他人の話を傾聴した上で自分の意見を伝える力	対人基礎力

○子ども学科

DP	査定材料	GPA（学内評価）	就業状況調査（学外評価）	PROG（客観的評価）
	達成が望ましい水準	2.00～3.00	5段階中平均3以上	平均2.5以上かつレベル2以下の割合が50%以下
1	主体性及び倫理観・使命感	基礎力プログラムⅠ	卒業後も自ら学び続ける力	対自己基礎力
2	専門性及び知識・技能	専門科目	ピアノ演奏や弾き歌いの音楽の技能	リテラシー総合
3	思考力・判断力及び表現力	教養科目	社内や部署内全体の状況を把握した上で働く力	コンピテンシー総合
4	課題発見力及び課題解決力	キャリアデザイン	課題を発見し、自分なりに考えた上で、新しいことをする力	対課題基礎力
5	コミュニケーション力及び多様な人と協働する力	基礎力プログラムⅡ	他人の話を傾聴した上で自分の意見を伝える力	対人基礎力

（２）査定時期・担当

卒業後半年経過時点の就業状況調査が終了次第、教学IR担当が上表を基に10月末頃に査定する。

（３）学内共有の流れ

運営協議会で査定結果について協議した後、教授会で全専任教職員に周知する。

（４）査定結果の活用

教育課程編成、学修指導、学修支援の改善に、各科(課)が活用する。

FD研修会やSD研修会の計画立案にも、担当委員会が参考として活用する。

I-3. 科目レベル

(1) 査定材料・達成が望ましい水準

査定表の通り以下の条件を同時に満たすとき、望ましい水準を達成しているとみなす。

①科目GPA . . . 2.00～3.00

②シラバスの到達目標に対する学生の達成実感度（授業アンケートで測定） . . . 60%以上

科目レベル 学修成果の査定					
成績基準	達成度 ※達成度は、授業アンケート到達目標の達成度「達成できた」「おおむね達成できた」の回答の割合で査定。				
	80%以上～100%	60%以上～80%未満	45%以上～60%未満	20%以上～45%未満	0%～20%未満
科目GPA 2.00以上～3.00以下	履修学生は、到達目標に到達したと実感している。科目GPAも標準内にある。到達目標と成績評価方法・基準は、関連性があり、適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、更に到達目標の内容を引き上げ、レベルアップにつなげることも可能である。	おおむねの履修学生は、到達目標に到達したと実感し、科目GPAも標準内にある。よって、到達目標と成績評価方法・基準は、適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、到達目標の内容をさらに学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。	約半数の履修学生が、到達目標を達成したと実感し、科目GPAも標準内にある。よって、到達目標と成績評価方法・基準は関連性があり、おおむね適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、半数近くの履修学生が到達目標に到達したと実感していないため、学生の達成度を上げる必要がある。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度が測定可能な内容にする。	約半数の履修学生が到達目標を達成していないと感じている。科目GPAについては、標準内にあるが、学生の達成度が低い傾向にあるため改善が必要である。 ◎次年度にむけては、学生の達成度を上げる必要がある。 ・到達目標と成績評価方法・基準を関連性のある内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度が測定できる内容にする。 ・到達目標は、難しすぎる設定になっていないか(学生に合致した内容にする)。	履修学生は、到達目標を達成していないと感じている。科目GPAについては、標準内にあるが、学生の達成度が低い傾向にあるため改善が必要である。 ◎次年度にむけては、下記の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準を関連性のある内容にする。 ・授業内容は、到達目標を意識して構成する。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度を測定できる内容にする。 ・到達目標は、難しすぎる設定になっていないか(学生に合致した内容にする)。
上記以外の科目GPA数値	履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標や成績評価方法・基準は、簡単すぎる内容または難しすぎる内容になっていないか(学生に合致する内容にする)。	おおむねの履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標や成績評価方法・基準は、簡単すぎる内容または難しすぎる内容になっていないか(学生に合致する内容にする)。	約半数の履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・GPAが低い傾向にある場合は、到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか(学生に合致する内容にする)。	約半数の履修学生が、到達目標に到達していないと感じている。また科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 【共通: GPAが高い・低いどちらの科目にも共通】 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 【科目GPA数値が標準より高い場合: GPAが高い】 ・GPAが高いが達成度は低い場合、授業内容・指導方法は到達目標を意識して構成する。 【科目GPA数値が標準より低い場合: GPAが低い】 ・到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか(学生に合致した内容にする)。	履修学生は、到達目標に到達していないと感じている。また科目GPAが標準外である。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 【共通: GPAが高い・低いどちらの科目にも共通】 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 【科目GPA数値が標準より高い場合: GPAが高い】 ・GPAが高いが達成度はかなり低い。 授業内容・指導方法は到達目標を意識して構成する。 【科目GPA数値が標準より低い場合: GPAが低い】 ・到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか(学生に合致した内容にする)。

(2) 査定期間・担当

各科目の査定は、学期末に授業アンケート結果ならびに成績評価が確定した段階で、各科目担当教員が行う。

(3) 学内共有の流れ

科目別に授業アンケート結果と授業検討票をまとめた冊子を教務担当が作成する。

その冊子を全教員が閲覧可能な学内サイトに設置して、学内で共有する。

また、学期別の全科目の査定結果を教務担当がまとめて、ホームページにて公表する。

(4) 査定結果の活用

各科目担当教員が、授業検討票（授業アンケート結果を基に授業の検証と具体的な改善策を学生に示す報告書）の作成に活用する。また、各科目担当教員が次年度のシラバス作成に活用する。

II. 3つのポリシーに関連するその他の教育分析

本学では、3つのポリシーに基づいた教育活動や学修成果の分析を強化するため、下記のIR活動を行っている。

3つのポリシーとの合致する適切な教育活動を行っているかどうかを、確認する。

Ⅱ－１．入試の妥当性の検証（アドミッション・ポリシー）

入学生の学修状況の観測や、入試の妥当性の検証のため、入学当初に得られる入学生の学修データからアドミッション・ポリシーとの合致性を確認する。

（１）査定材料・達成が望ましい水準

AP	国文学科 日本文学コース	査定材料	達成が望ましい水準
1	日本語、日本文学・文化、司書資格など国文学科での学びに対して意欲・関心を持っている人	就職希望状況（入学時の進路調査）	就職または進学を希望する割合80%以上
2	日本語、日本文学・文化、司書資格など国文学科で学ぶための基礎学力を身につけている人	PROG	リテラシー総合 平均2.5以上かつレベル2以下の割合が50%以下
3	目標に向かって課題を明らかにし、改善に向け主体的に取り組む意欲を持っている人	学習動機（学修行動調査）	実用志向の割合80%以上
4	自身の考えを客観的・論理的に表現する力を身につけたい人	課外活動（学修行動調査）	入学後の参加希望の割合80%以上

AP	子ども学科 保育士養成コース・小学校教諭養成コース	査定材料	達成が望ましい水準
1	子どもに対する愛情と、保育・教育の学びに対して意欲・関心を持っている人	就職希望状況（入学時の進路調査）	保育・教育分野への就職希望率80%以上
2	保育・教育を学ぶための基礎学力（特に「国語」）を身につけている人	PROG	リテラシー総合 平均2.5以上かつレベル2以下の割合が50%以下
3	目標に向かって課題を明らかにし、改善に向け主体的に取り組む意欲を持っている人	学習動機（学修行動調査）	実用志向の割合80%以上
4	実践的な学びや、学び合いの基になる基礎的なコミュニケーション力を身につけている人	課外活動（学修行動調査）	入学後の参加希望の割合80%以上

（２）査定期間・担当

査定を実施する場合は、査定材料が収集できた段階で、教学IR担当が上表に則り5月頃に査定する。

（３）学内共有の流れ

入学者選抜委員会で、入学生の状況を確認する。その後、教授会で全専任教職員に概要を周知する。

（４）検証結果の活用

入試制度の計画立案、入学前教育の参考として活用する。

Ⅱ－２．入試の妥当性の検証（ディプロマ・ポリシー）

本学の卒業生が受験した年の入試が、中長期の様々な学修データを参照するとき、ディプロマ・ポリシーに合致して卒業していたかどうかを入試区分別に検証する。

入試の得点率順に、合否判定状況、学籍異動状況、累計GPA、資格取得状況、就職状況を参照し、入試が適切に行われていたかどうかを検証する。

（１）検証材料

①出願者数、合格者数、不合格者数、入学辞退数、入学者数

- ②入試得点率（取得点数÷満点）
- ③高校在学時の情報（評定平均、欠席日数等）
- ④学籍異動状況（休学・退学・除籍）、標準年限学位授与率
- ⑤在学時の成績（累計GPA）
- ⑥資格取得状況
- ⑦就職状況（就職・進学等の別、就職業界）
- ⑧就業状況調査（卒業半年時点での就職先からの評価）

（２）査定時期・担当

査定を実施する場合には、卒業後半年経過時点の就業状況調査が終了した段階で、教学IR担当が上表を基に10月末頃にデータを算出する。その結果を踏まえて、入学者選抜委員会が入試の妥当性について決定する。

（３）学内共有の流れ

入学者選抜委員会で、関連データと協議結果を共有する。その後、教授会で全専任教職員に概要を周知する。

（４）検証結果の活用

入試制度の計画立案、学修支援の参考として活用する。

Ⅱ－３．履修体系の点検・次年度の教育課程編成のためのIR情報の活用（カリキュラム・ポリシー）

（１）点検材料

- ①次年度のカリキュラムマップと開講科目情報
- ②教育課程レベルの学修成果の査定結果
- ③科目レベルの学修成果の査定結果

（２）査定時期・担当

次年度のカリキュラムマップが確定した段階で、教学IR担当が点検材料を収集する。

これらを踏まえて3月末までに2回、教育課程編成について運営協議会で学長・副学長が中心となり検討する。

併せて、教育課程の運営に携わる委員会や学科の業務を点検する。

（３）学内共有の流れ

運営協議会の委員が、各自の所属する各科(課)に共有する。

（４）点検結果の活用

次年度以降のカリキュラムマップの見直しに活用する。

Ⅱ－４．教育活動の適切性の点検（3つのポリシー）

今年度実施した主な査定や点検の結果概要を横断的に年度末に参照する。

それにより、本学の取組が3つのポリシーを踏まえて適切に実施されているかを確認する。

（１）点検材料

- ①入試の妥当性の検証（入学生対象） … APに関連
- ②入試の妥当性の検証（卒業生対象） … DPに関連
- ③教育課程レベルの学修成果の査定 … DPに関連
- ④履修体系の点検 … CPに関連
- ⑤地域社会や産業界等、本法人の外部の意見

(2) 査定時期・担当

2月頃に、教学IR担当が点検材料を収集する。

運営協議会で学長・副学長が中心となり、教育活動が3つのポリシーを踏まえて適切に行われているかを判断する。

(3) 学内共有の流れ

運営協議会の委員が、各自の所属する各科(課)に共有する。

(4) 点検結果の活用

3つのポリシーを踏まえた教育活動の強化、自己点検に役立てる。

以上